

第3回みやぎ観光振興会議登米圏域会議 概要

委員からの主な意見

- 回復戦略の安全安心の取組について、一律の基準で一方向的に事業者に取り組みさせるだけでなく、ミシュランガイドのように事業者が自ら考えて目標を立て取り組み、それに対し評価する仕組みも検討されるよう提案する。
- 登米圏域は宿泊施設が少なく通過型観光が主であることから、まずは日帰り旅行を想定し、いろいろなイベントを仕掛け、その上で宿泊を伴うコース等の充実も図っていくべき。
- 登米圏域のタクシー業界はこれまで観光に直接関わることがなかったが、この会議をきっかけとし、圏域観光を勉強して運転手個々の資質向上に努めるとともに、事業者に積極的に協力していきたい。
- 登米圏域は観光情報の発信力が弱いので、ソーシャルメディアを活用するなどもっと工夫が必要。
- ふるさと納税の返礼品の仕組みを活用し、利用者へ観光PRすることも一案。
- コロナ禍で現実の移動が制限されている中で、ゲームコンテンツとのコラボなど、オンラインを活用した観光の仕組み、さらには観光収入に結びつけられる仕組みも有効。
- インターネットを活用したPRも大事だが、登米の観光コンテンツは初めての人にはわかりづらいと思うので、ある程度の営業活動をしてお客様を獲得していくという姿勢も大事。
- 旅行者に選ばれる地域、お金を出してもまた来たい、と思えるような地域になる必要があり、そういった価値を創り出す施策、取組が必要。
- 補助や割引等旅行者に対する支援施策が目立つが、広告費補助や受入態勢の充実等、施設側に対する支援も手厚くしてほしい。
- 単に割引いて安くして誘客を図るのではなく、旅行者、事業者お互い納得の価格で、そこに付加価値を付けて旅行客の満足度を向上させるのが本来あるべき姿。
- 地元の食材を使用している飲食店等が意外と少なく、あってもその食材がどういった背景でその地域で作られてきたのか知らない人が多いので、そこを学びPRしていくのも満足度向上の一案。
- 一例だが、オルレの登米コースの橋が破損していたり、木製ベンチが苔だらけだったりしていたので、せっかく登米に来た人を残念に思わせないような取組も重要。
- みやぎの明治村は中核となる観光施設だが、石ノ森章太郎ふるさと記念館など訴求力ある施設もほかに点在しているので、それらも絡めて一体的に観光推進していく方策もある。
- 登米市には伊豆沼、長沼、平筒沼などのほか、南方の千本桜、蓮の花などもあるので、登米市の豊富な自然、四季を活かした年間を通じて連続したコンテンツも有効。
- グランピングは、形態によっては簡易宿所としての許可が必要であり、グランピング一本では厳しいので、ソロキャンプも含めたキャンプ全般をテーマにしたほうがいい。
- SDGsやCSRの観点から、企業活動を登米地域へ誘致していくことも一案。
- 「おかえりモネ」については、グッズやロゴ商品の販売だけではなく、中身のあるものやっていると、長く効果を持続させることは難しいと思う。
- 「おかえりモネ」の放送開始後は、ファンがロケ地巡りをするなど様々な動きが出てくるので、気仙沼地域との連携がさらに重要になってくる。
- 一次産業が盛んな地域であるので、一次産業者と協力して連携する仕組みを作り、地域の事業者みんなが一体となって地域を勉強する機会があってもいい。
- 観光振興リーダーの育成と併せて、観光ガイドの育成も行うべき。地域の観光コンテンツについて勉強できる、まとまったテキストがあると良い。